

農村を描いた現代詩

The Deserted Village を手がかりに John Montague の *The Rough Field* を読み直す

西谷 茉莉子

はじめに

アイルランド移民二世としてブルックリンに生まれ、4歳から11歳まで北アイルランドのティローン県、ガルヴァヒーで育った John Montague は、キャリアの最初期から故郷を描くという強い望みを抱いていた。1972 年に出版された長編連作詩 *The Rough Field* は、彼にとって、北アイルランドを主題とする試みのひとつの到達点であり、アルスター史を題材としながら、南北アイルランドの状況に敏感に反応した野心作である。創作時の Montague の主な関心は「現代的なアイルランド詩」の模索であった。当時の共和国は歴史的な転機を迎えており、それに呼応するかのように、1962 年、ダブリンを本拠地として活動する気鋭の詩人の作品を収めたアンソロジー *The Dolmen Miscellany of Irish Writing* が出版される。この新しい時代の到来を告げるマニフェストの場で、Montague が詩ではなく、“Oliver Goldsmith: The Sentimental Prophecy”と題した *The Deserted Village* 論を寄稿しているのは示唆的である。このアンソロジーが発表されたのは *The Rough Field* の着想から間もない時期であり、本作を創作するにあたって *The Deserted Village* が何らかの形で参照されたとするのは妥当な考えであろう。本発表では、パート 6 “A Good Night”に残された、Montague の *The Deserted Village* 受容の痕跡を辿る。田舎の一夜の他愛のない出来事が伝統的な詩形で語られているため、このパートは *The Rough Field* の中では比較的シンプルに見える。だが、そのような印象に反して重層的な解釈が可能な詩群であり、Montague の文学的伝統に対する意識が強く滲み出ている。

The Rough Field 創作時における北アイルランドの農村の変化

Montague が *The Rough Field* を執筆した時期、北アイルランド社会は都市化、産業化の機運にあった。加えて、農村部では農業の近代化が進行していた。この流れは、第二次世界大戦中、イギリスへの軍事協力のために北アイルランド政府の主導で行われた農業計画に端を発する。1963 年、*The Spectator* に掲載された Montague によるエッセイ“Tyrone: The Rough Field”では、大戦以来、ティローンの急速な変化の中で、昔ながらの風習が廃れつつある様が捉えられている (FC 25-26)。新しい農村表象を模索していた Montague が、このような変化から詩の着想を得たことは確かだ。しかし、彼が故郷の農村の変化を喜々として受け入れたとは考えにくい。Montague の感情の揺れは、*The Rough Field* のエピローグにおいて、*The Deserted Village* で描かれる架空の村オーバンが「遠くて」(remote)「近い」(friendly)と表現されていることから窺える。この逆説的な距離感は、詩人が抱く、過去への不可逆性の認識と抑えがたいノスタルジーの相克の表れであると言えよう。最終的にこの作品は、再び故郷を離れつつある語り手が、少年時代の農村生活を「過ぎ去ったもの」として受け入れる場面で締めくくられる。

具体的な事象は異なるものの、Montague にとって 1960 年代の北アイルランドで進行中であった農村の近代化は、*The Deserted Village* で描かれた状況と響き合っており、故郷を離れたなかば余所者としての彼の立ち位置は、この作品の語り手のものと重なっているように思えただろう。何より、農村の近代化に対する関心と過去に対するノスタルジーの間で揺れる感情を詩に昇華する術を、彼は *The Deserted Village* から学んだのではないか。

Montague の *The Deserted Village* 受容——“Oliver Goldsmith: The Sentimental Prophecy”

“Oliver Goldsmith: The Sentimental Prophecy”において Montague が強調しているのは、*The Deserted Village* に描かれたオーバンの普遍性であった。彼は、Goldsmith がパストラルの「型」(conventionality)を巧妙に使用することで、それを可能にしたと考えている。また、エッセイ終盤では、*The Deserted Village* は「商業社会における伝統的価値観と自然のリズムの侵食」といった「現代の主要なテーマ」が表明された最初期の作品であると述べられる。オーバンの衰退は「社会全体の秩序の衰退」であり、「Wordsworth、Lawrence や Pound、そして Big Woods の破壊に対する Faulkner の抗議」を予見させる主題の祖型として位置づけられているのだ。このように錚錚たる作家の名を連ねた後で、Montague は、*The Deserted Village* が「食欲さによるイギリスの没落の予言」であり、Goldsmith が「最も大英帝国が拡大した時代に、最初の反帝国主義的な詩を創作した」と主張することで、「現代における主要なテーマ」を「アイルランドらしいテーマ」に置き換えてみせる (FC 75)。エッセイの終わりにかけて、Montague の *The Deserted Village* 受容はさらにアイルランド色を強めていく。彼は、*The Deserted Village* には「劇的」で「センチメンタル」な表現に読者が共感するような説得力が持たされていると指摘する。そのうえで、「もしセンチメンタルであることが、与えられた事実を超えた感情を見せることを意味するのであれば、*The Deserted Village* はセンチメンタルな予言と呼ぶにふさわしい」と述べ、Goldsmith がハーブ奏者 Carolan について書いたエ

ッセイに触れながら、*The Deserted Village* におけるセンチメンタリティをアイルランドのバードの「感情の誇張」と同一視する(FC75)。*The Deserted Village* を帝国主義に対するプロテストとみなすにせよ、オーバンを失われたゲール社会に重ね合わせるにせよ、Montague の主張はこの作品をアイルランドの文脈から解釈したものと言えよう。

文学的伝統の型とそこからの逸脱——*The Rough Field* のパート 6 “A Good Night”を読む

Montague のアイルランド的な *The Deserted Village* 解釈は、*The Rough Field* の構想に活かされた。パート 6 “A Good Night”では、帰郷した語り手が幼馴染と寄り集まって飲み明かすという話をベースに、「現代の主要なテーマ」が扱われている。ここでは、*The Deserted Village* 論で着目されたバードの「感情の誇張」は、詩の外で表現される。パート 6 のタイトルページには、イングランドに抵抗して鎮圧されたゲール人貴族のローリー・オグ・オモアの絵が挿入されており、パート 6 の最終ページの余白には、バードの絵が組み込まれている。いずれも John Derrick の *The Image of Ireland* を典拠とする図版であり、悲嘆にくれるゲール人貴族や感情に訴えかけるバードという視覚的情報がこのパートの外枠を構成している。パート 6 では、パブ兼民家に村の人々が集まる様子が描かれているが、このような会合はダンスホールといった近代的な娯楽に取って代われ、消え行く運命にあることが示唆される。つまり、この詩群はローリー・オグ・オモアの嘆き、ゲール社会の崩壊を悼むバードの嘆きと共鳴しながら、60 年代のティローンにおいて失われつつある伝統的な生活を悼むエレジーなのだ。

Goldsmith が在りし日のオーバンにパストラルのクリシェを用いたように、このパートでは少年時代のガルヴァヒーでの思い出を描くのに文学的伝統の型が使われている。パート 6 の 4 番目の詩 “The Source”では、山小屋に移動して飲み明かした仲間たちが夜明け前に解散した後、語り手はひとり帰路に着く。道すがら、彼は少年の頃、泉の石の下に手を入れて、地元の言い伝えにある「巨大な鱈」を探したことを思い出す。彼の冒険は子供らしい振る舞いとして回想されるが、「水の音楽」に導かれながら川をさかのぼり、その水源の「鼓動」に触れるという一連の行動は、ヘリコン山の泉に寄せてミューズに靈感を求める行為を連想させる。その後、語り手は、少年の彼が手に入れようとした「巨大な鱈」が「知恵の鱈」だったのだろうかと自問する。ここでは、アイルランド神話が意識されていることに留意すべきであろう。

“The Source”の最後の場面では、クリシェでもって描かれる少年時代の回想にあっけなく終止符が打たれる。「酔っ払いの第七感」に「誰かに見られている」と告げられ振り返った語り手は、「草の中で身じろぎせず、皿のような目をして」彼を凝視している若い雄牛たちに遭遇するのだ。ここで指摘したいのは、Robert Graves が *The Deserted Village* を 18 世紀のゲール語の「アシュリング」の伝統と関連づけていることを、*The Deserted Village* 論において Montague が取り上げていることである。Graves は、「Goldsmith が同時代のアイルランドの吟遊詩人の歌に倣って、アイルランドの苦境を嘆く詩を作った」と信じており、*The Deserted Village* の語り手はアシュリングにおける語り手のように、「歩き、描写し、瞑想し、道徳的なヴィジョンを描き、女神を呼び出す」(FC63)と述べている。「女神」との遭遇を除いて、これらがパート 6 で語り手がとる行動に大方当てはまることを考慮すると、Graves の *The Deserted Village* の解釈が “The Source”の創作に影響を及ぼした可能性が浮上する。また、語り手の酩酊状態は、アシュリングにおいて詩人が見る夢や幻のパロディとみなすことができるだろう。このように、“The Source”では、古典やアイルランドの詩の伝統を下敷きに、少年時代の思い出が高揚感とともに語られる。だが最終的には、伝統の型からの逸脱が示され、語り手の高揚感は挫かれることになる。

むすび

1960 年代、「現代的なアイルランド詩」の方向性を模索していた Montague は、新たな農村表象のあり方を探る中で *The Deserted Village* から多くの示唆を得た。パート 6 では、農村の日常を描いた話を基に「現代詩の主要なテーマ」が扱われる。また、Montague が見出した Goldsmith の「パストラルのクリシェの巧妙な使い方」は、在りし日の故郷の回想に「黄金時代」の普遍性を与えるために参照された。だが、文学的伝統の定型が演出する「過去への回帰」にアンチクライマックスがもたらされることによって、語り手のノスタルジーは否定される。さらに、*The Deserted Village* から引き継いだパストラルの伝統は、ローカルな要素を付与され、アシュリングの伝統へと接続されていることにも目を向けるべきであろう。Montague の *The Deserted Village* 受容は、彼が文学的伝統を重視し、新たな伝統を作り出そうとしたことの証左となっていると結論づけられる。

引用文献

Montague, John. *The Figure in the Cave and Other Essays*. Edited by Antoinette Quinn, Lilliput Press, 1989.

---. *The Rough Field*. 6th ed., Wake Forest UP, 2005.